

石巻に来て約2ヶ月の間、私たちはほぼ毎日ファミレスに通っていた。ネットと電源を同時に確保できる場所としてファミレスは優秀であるからだ。何時間も同じ場所にいると、周囲の席の人たちが何度も入れ替わっていく。別に聞き耳を立てているわけではないのだけれど、ファミレスの客が語る雑談の中で「震災」という単語が極めて頻繁に出てくることに次第に気がつくことになる。あの日の延長に今日という日があるのだという当たり前のことによろやく気がつかされるのだ。東京ではその単語を耳にすることは、もうほとんどない。

私たちは、この地に住む色々な人たちにインタビューをすることにした。多くの人が口にしたのは「7年経ったからこそ、よろやく言えるようになったことがある」ということだった。もしかしたら、今こそ群像劇を描くタイミングなのではないか？ そう思うようになった。大きな物語としての震災ではなく、カフカの「城」における城のような、カミュの「ペスト」におけるペストのような、不可視の中心点として震災を描くべきなのではないかと思った。

だから私たちは、二つの仕掛け（質問）を投げかけることにした。一つは「消したいものはありますか？」という質問。震災で多くのものが消えてしまったこの場所で、あえて「消したいもの」について質問をする。そしてその消したいものを実際に（データ上で）消してもらう。

もう一つは、「生まれ変わったらどうなりたいか？」という質問。あの時、もしかしたら自分は死んでいたかもしれないという「If」の世界線をこの地の多くの人たちは共有している。そのIfの断片を呼び起こすために、7年前に生まれたセミの抜け殻を潰しながら、生まれ変わった後の己の姿を想像してもらった。

結局消したいものは消えやしないし、生まれ変わることは無理かもしれない。しかし質問と行為を通して、震災の延長としてあり続けるこの場所の「今」と、その「今」の真隣にモヤモヤと存在し続ける「If」の世界線、その両方に接近していく。「震災」という大きな物語から派生して生まれた7年目の群像劇は、とても静かな囁きの集合である。しかしそれらは全てが繋がっている。ここにはたくさんの声が眠っている。駆け足で芸術祭を巡らねばならない人たちにはやや不親切な展示設計となっているかもしれない。でもできることならば、しばしこの暗い部屋の中で、7年目の声に耳を傾けて欲しい。